く拜べて、袖口も黑く、すそも山道にとるぞかし、それ迄は目せきあみ笠、うねたびに、もみのくけひも、今のすあしに見合、おかしき事も有て、過侍る云々いへり、

道中

〔一目千軒〕道中の事

道中には眞行草の三の品ある也、これは此道のならひ有事にて口傳、揚屋入を道中といふ事、太夫は付人も多く、誠に花やかなる旅よそほひのこゝろ也、出立といふより、道中と號するよし、かどりに左づまもあり　毎月廿一日に道中有也、眞の道中は新艘出る日ばかり也、是はなはだ見物事にて、此日人山をなす、

〔塵塚談上〕新吉原遊女衣服の事、延享寛延の頃迄は、紗綾縮緬羽二重を著し、中の町へ出る、これを道中といふ、衣服も品々ありて、毎日取替へ著し、同じ衣類は決して著ざりしとなり、さて多葉こを少しづゝ、紙につゝみ、禿に數多く持せ、茶屋にて一服のみ殘りはそのまゝ、茶屋にさし置て立なり、たち寄茶屋毎に右のごとし、○中略　然るに遊女ども三四十年以來、羽二重紗綾等は更に用ひず、錦繡の如き美服を著る事になりぬれど、たゞ一ッにして中の町へ出るに、毎日同じ物を著し、著替へは一つも持ざるよしなり、たばこなども高價の物を用ゆれど、少しも人に呑する事なし、時勢の然らしむるの人情、かくいやしくなれり、

〔皇都午睡三編中〕中の町張のおいらんと云は、皆お職の飛切にて、新造禿を隨がへ、向ふに箱桃灯を一對、男にもたせ、好の襠にて夕方前仲の町へ練り出す、先に右側を通れば、後には左側を通るにて、茶屋の亭主女房など、店先より挨拶に出て、ちとおかけなどゝいへば、此店へ腰をかけ、往來の方を流しめに見て、長ぎせるにて煙草をのむ、客衆來た來ぬの噂は、付そひの新造よりいはせるのみにて、詞數甚少なし、○下略

〔嬉遊笑覽九娼妓〕又内八文字といふあゆみやうも、京師の風なり、諸艶大鑑ニ、先一番に都の三夕、各